

## 第1章 屋良朝苗の日本復帰運動の原点 —1953年の全国行脚—

はじめに

- 1 屋良朝苗の足跡
- 2 全国行脚の背景と概要
  - (1)背景
  - (2)概要
- 3 復帰の論理
  - (1)日教組教研集会でのスピーチ
  - (2)衆議院文部委員会での証言
  - (3)紙上座談会
- 4 屋良による沖縄および日本への認識
  - (1)日本の農業への評価
  - (2)植民地としての沖縄
- 5 屋良の民族認識

おわりに

## 第1章 屋良朝苗の日本復帰運動の原点—1953年の全国行脚—

いやしくも祖国を有し、それと一連の共通の文化と歴史を持ち、日本人としての民族的矜持を有する沖縄の住民が、どうしていつまでも異民族の統治下に満足しておられましようか

屋良朝苗「第15回国会衆議院文部委員会議事録」第10号（1953年2月19日）

沖縄の人々の為に父は命をかけているのだ

屋良朝苗『屋良朝苗日誌001』（1953年2月3日）

### はじめに

屋良朝苗（1902～1997）が沖縄の復帰運動において中心的役割を果たした人物の一人であることに、疑いを持つ人は皆無であろう。屋良は占領下の沖縄にて復帰運動を主導してきた沖縄教職員会の初代会長であり、1968年に琉球政府公選主席に選ばれてからは、沖縄側の責任者として日本や米国との折衝に従事した。1972年に復帰が実現した後も、沖縄県知事として特別国体や海洋博など数々の復帰事業を遂行した。

沖縄教職員会を復帰運動で主要な役割を果たした組織として取り上げた先行研究は数多くある<sup>1</sup>。しかし、戦後沖縄史および復帰運動のキーパーソンである屋良個人を対象とした研究は、その存在に比するとそれほど多くはない。数少ない例としては、屋良を政治主導者として取り上げ、日本という国家的枠組みにおいて民族アイデンティティを強調したことによって求心力を保ったと解釈するものや<sup>2</sup>、屋良が復帰運動を推し進めた理由として、戦災に遭い米軍からも十分な支援を得られないという教育環境において、「校舎復興や教員待遇改善といった、自分たち自身の幸福」を指摘しているものがある<sup>3</sup>。しかし、戦後沖縄史、とりわけ沖縄が日本へ復帰する過程を検証する上で、屋良個人が有していた復帰思想をより詳細に検討することは避けられない課題であろう。

そこで本章は、これらの先行研究を踏まえながら屋良の復帰思想の淵源を探究するため、1953年1月から6月にわたって屋良が行った沖縄戦災校舎復興募金運動を取り上げる。この運動は沖縄戦災校舎復興促進期成会会長となった屋良が半年間で日本各地を回り、校舎復興のための募金を呼びかけたものである。屋良は後年、この運動は単なる資金集めではなく、沖縄の日本復帰を日本国民の課題として認識させるために行われ、「その後の私の十数年間に及ぶ復帰運動の基盤となった」と記している<sup>4</sup>。本運動は屋良自身が日本に初めて直接働きかけた運動でもあり、いわば屋良の復帰思想の原点として位置づけられる。

本章では資料として、『屋良日誌』のほか、衆議院文部委員会に参考人として出席した際の議事録や全国行脚の様子を報じた地方紙の記事などを用い、屋良の復帰思想の原点を探る。

これらの資料を分析し屋良の復帰思想を検証する上で、本章は以下の3点に注目する。

ひとつめは復帰の論理である。屋良は1953年の時点で沖縄の日本復帰に対する正統性をどこに求めていたのかに着目する。ふたつめは屋良の日本と沖縄への認識である。屋良はサンフランシスコ講和条約によって独立を果たした日本をどのように捉え、いまだ米軍占領下にあった沖縄の状況をどのように認識していたのか。みつめは屋良のナショナル・アイデンティティ（民族意識）である。屋良が沖縄の人々は日本国民であり、分離された沖縄が祖国である日本へ復帰することにより幸福を享受できると訴えたことはよく知られている。しかしこのことは、単純に屋良自身も日本人であると内面的に認識していたということを意味するわけではない。そこで『屋良日誌』を分析することにより、屋良自身はどのような民族意識を持っていたのかを検証する。

本論に入る前に、全国行脚に至るまでの屋良の足跡を生き立ちから確認しておこう。

## 1 屋良朝苗の足跡

屋良は1902年、読谷村に農家の四男として生まれた。体は弱いものの勉強が好きな少年は、畑仕事を手伝わなくてはならないという家庭の事情から中学校への進学できなかった。しかし教師が親を説得したことで、小学校高等科へ進学する。高等科卒業後、2年半ほど農業に従事し、さらに小学校の使丁を務めた後に、屋良は沖縄県師範学校へ入学する。25年には、広島高等師範学校の入学試験に合格する。読谷村から初の合格者ということで有志が募金を集め、さらに村は屋良のために貸費制度を作り学費金として充てた。しかし、兵役のためすぐに入学することはできず、1年間の兵役の後、屋良は広島高等師範学校へ入学する。30年に卒業、帰郷し高等女学校の物理担当の教員となった<sup>5</sup>。

5年後に中学校へ転勤した屋良は「沖縄にばかりいると、なにかしら将来の希望がもてない」と考え、1938年に台湾の台南第二中学校へ転勤する。この中学校では5年間教鞭をとることになるが、学校の設備は沖縄のものよりもはるかによかったという。ここで屋良は「植民地青年のたどる一つの間像というのが、どのようなものになっていくか」を知った<sup>6</sup>。台湾出身の学生は85%を占め、また押し並べて優秀であったが、台北の高等学校へ進学することは難しかった。それは植民地政策が強く反映されていたためであり、台湾出身の教師や青年たちは不平等な境遇にあった。屋良は台湾出身の学生を「植民地青年という、ある権力のもとで教育をさせられているということは、積極性が乏しくなって、表裏のある人間に形成されていく」「非常に自主性に欠けて、責任感に乏しい人間になっていく」と評した<sup>7</sup>。そこで熱意をもって教育を施した屋良は「師弟の気持ちは民族をこえるものがある」と感じた<sup>8</sup>。

台湾の6つの師範学校が整理統合されたことを受けて、屋良は1943年に台北師範学校へと転任する。戦火が激しくなるにつれ、師範学校も軍への協力を求められ十分な教育を施すことができなくなった。沖縄出身の教え子たちは屋良の自宅での防空壕の作業などを手伝い、屋良はかわりに十分な食事を与えた。またある時、教師のひとりが幹部候補生の推薦会議の

際に、沖縄出身の学生は積極性が足りないと評した。このことを聞いた沖縄出身の学生たちが抗議の可否について屋良に相談し、それに対して屋良は抗議を許可している<sup>9</sup>。

終戦後には台湾の学生へ差別的な扱いをしていた日本人の教員や学生に対して、台湾人学生たちによる暴行事件が多発していた。しかし不思議と沖縄出身者が殴られることはなかった。その理由として「中国と沖縄は縁が深いから」と聞き、「苦笑した」という<sup>10</sup>。

1946年、屋良は地上戦で焦土と化し、未だ復興もままならない沖縄へ引き上げた。47年に知念高校校長となったが、机や腰掛けもない状態での学校運営は困難なものであった。「私の胸を強く打ったことは、生徒が教科書もノートももっていないことである。一度書いた紙をノートがわりに使っているみじめな姿をみて、これではたして高校の教育がなりたつものであるか」と語っている<sup>11</sup>。

1950年、米軍の方針による日本への指導教育者の講習派遣で、屋良は九州大学を訪れる。新教育がはじまり、立派な校舎が建てられ街の書店では参考書が並ぶさま、そしてきれいに着飾った生徒や先生を目の当たりにして「これにくらべて沖縄の子どもたちがかわいそうではなかった」。沖縄へ日本の教育環境について報告がなされたのはこれが初めてであったという<sup>12</sup>。

同年、沖縄群島知事に平良辰雄が当選したのを受け、屋良は沖縄群島政府文教部長への就任を依頼され、これを受諾する。1951年には琉球大学創立記念式典に出席した水谷昇文部政務次官を介して文部大臣へ校舎復興支援を要請している<sup>13</sup>。屋良は琉球列島米国民政府とも交渉を行い、校舎の復興や教員の待遇改善に奮闘したが支援は十分に得られなかった。そこで屋良は「解決の道を祖国政府や、国民の協力に求める以外にはな」と決意する<sup>14</sup>。52年1月に開催された第3回全島校長会議では「米国は沖縄のことなど決して考えてはいない。立ち上がろう。われわれが立ち上がらなければ民族は救われない」と発言し、参加者は「沖縄の生きる道は復帰する以外にない」と結論づけた<sup>15</sup>。52年の群島政府解消を機に下野し、沖縄教職員会会長に就任する。

## 2 沖縄戦災校舎復興募金運動の背景と概要

### (1)背景

沖縄戦災校舎復興募金運動は1953年に開始されたが、その4年前の49年には中華人民共和国が建国され、50年には朝鮮戦争が勃発するなど、50年代初頭は東アジアにおいて冷戦が顕在化した時期であった。そして51年のサンフランシスコ講和条約調印によって沖縄は日本から分離されることが決定し、占領下の沖縄では土地の強制接収による米軍基地の建設が進められた。沖縄の帰属については、1945年以降の軍事占領初期においては独立論が顕著であったが、後に復帰論が高まっていく<sup>16</sup>。

戦後いち早く復帰を主張したことで知られているのは、元首里市長の仲吉良光である。終戦を沖縄で迎えた仲吉は、日本復帰をまず日本在住の沖縄人に訴えた。そして在京の同志と

共に沖縄諸島日本復帰期成会を結成し、日米両政府へ沖縄の日本復帰を陳情した。仲吉の復帰思想の背景としては「日本（本土）との強固な文化的一体感」によるものであったという指摘がある<sup>17</sup>。他方で仲吉の復帰運動は沖縄への愛郷心から生じた現状への危機感を、ソテツ地獄期から続く「陳情」というスタイルによって表現したものとする解釈もある<sup>18</sup>。

また、1951年の沖縄群島議会では「日本復帰要請」が決議された。この決議案をめぐって議会では復帰派（沖縄社会大衆党・沖縄人民党）と独立派（共和党）の間で論争が展開されていた。この議論の争点は一見、日本復帰か、独立国となって米国追従を図るかという点に集約しているように見える。しかしその内実は、双方とも沖縄ナショナリストとして沖縄をいかにより良くしていくかという点では同一であり、対立点はあくまで方法論の相違にあったという<sup>19</sup>。

同年、沖縄社会大衆党（社大党）および人民党がそれぞれ党大会で日本復帰運動の推進を決議し、両党および民主団体による「日本復帰促進期成会」が結成された。同会による署名活動では有権者の72.1%にあたる署名が集められた<sup>20</sup>。しかし、60年代の復帰運動でその正統性を担保する上で重要な役割を果たした日本国憲法は、50年代前半の論説等で言及されることは極めて少なかった。その理由としては一般生活の復興がままならない沖縄において新憲法に関心を示す余裕がなかったことが指摘されている<sup>21</sup>。終戦直後には米国との協調によって自治を獲得しようとする動きもあったが、米軍による沖縄の基地化を前提とする占領政策はそれを許さなかった。その閉塞状況を打破しうるものとして浮上したものが日本復帰であった<sup>22</sup>。

独立から復帰へという流れは、教職員の間でも例外ではなかった。屋良とともに沖縄教育界の指導者として知られる仲宗根政善は、終戦後の数年は沖縄独自の教科書作成に取りかかり、天皇制および軍国主義からの解放を歓迎するなど総じて非日本志向であった。しかし、1950年代に入ると日本への研修で見聞した復興した日本の姿、そして「在日の先輩」に激励されたことにより日本復帰へと傾倒していく<sup>23</sup>。同時期に群島政府文教部長であった屋良が全島校長会を開催し、日本復帰決議がなされたことは前述の通りである。52年4月にはこれまでの沖縄教育連合会を改組する形で沖縄教職員会が発足する。以上の過程を経て、教員が組織化され、復帰運動の中心的役割を果たす条件が整備されていった。

## (2)概要

このような社会状況の中、屋良らは戦災校舎復興促進期成会を結成し日本本土における募金運動を開始する。この全国行脚は東京を拠点とし、1953年1月から6月までの半年間をかけて行われた。東京では戦災校舎復興後援会を結成し、会長に元大蔵大臣の渋沢敬三を迎えている。屋良は喜屋武真栄（後の沖縄教職員会会長、参議院議員）と共に沖縄以外の46都道府県を訪ね、各地の知事や議会議長、自治体、新聞社や商工会議所などを訪問し、日本復帰を訴え、戦災校舎復興への協力を要請した（表参照）。東京では外務省や文部省など政府機関へ陳情し、衆議院の文部委員会では参考人として出席している。さらに自由党や改進黨

党、左右両派社会党などの主要政党にも働き掛けていた。全国の訪問先では沖縄教職員会機関誌『教育新聞』の特集号「全国民に訴える」「全国の教職員に訴える」「全国の児童、生徒に訴える」と高嶺明達による著書『太平洋の孤児』、そして沖縄の校舎の写真を綴じたアルバムを配布した<sup>24</sup>。全国各地を周る際には、日本教職員組合の各支部が受け入れ役となり、屋良らの活動を支援していた。なお、募金額は1955年までに約6300万円となったが、校舎建設への支出を米国民政府が許可しなかったため、学校備品の購入費となった。その結果、図書やピアノが「愛の教具」として沖縄各地の学校へ寄贈された<sup>25</sup>。

以上が戦災校舎復興募金運動の背景と概要であるが、そこで屋良は日本復帰をどのように訴えたのだろうか。次節ではその復帰の論理を探る。

表 全国戦災校舎復興募金運動に関する新聞報道一覧

日付	新聞紙名	見出し
1月26日	高知新聞	全国教研大会開く／活動の実績を討論／立すいの余地ない会場
1月30日	高知新聞	沖縄のこども達に尾長雉の柱掛け
2月2日	徳島新聞	戦後の奇型児沖縄の近況／来県の二教員語る／米国兵が右往左往／傷だらけの“馬小屋校舎”
2月2日	徳島民報	切々訴う復帰の願い／沖縄から両氏来県／荒廃ワラぶき校舎／教育復興こそ沖縄の再建
2月11日	上毛新聞（群馬）	教育の危機訴える沖縄／なり手がいない先生／屋良氏（沖縄教職員会長）ヒョッコリ群大留学生を訪問
2月12日	朝日新聞	“沖縄の校舎再建に”／玉川学園生徒が本社に寄託金
2月24日	読売新聞	“馬小屋校舎”なくしたい／沖縄から浄財集めに日本行脚
3月28日	山陰新報（島根）	沖縄の教育実態はこうだ／校舎は大半掘建小屋／教材もなく雨降れば授業は休み／切々願う日本への復帰
3月28日	日本海新聞（鳥取）	悲劇の島沖縄の子供ら／ワラ家で勉強／先生が救済訴えに来県
4月7日	熊本日日新聞	沖縄は訴える／八割が青空授業うく／島民の悲願戦災校舎の復興
4月14日	中国新聞（広島）	暗い南西諸島の教育問題／可哀そうな子供たち／両代表が広島で訴える
4月16日	山陽新聞（岡山）	祖国復帰と戦災校復興を／沖縄から協力要望に二氏来県
4月18日	神戸新聞	沖縄はこんなにひどい／校舎は馬小屋なみ／小学生がポン引きに出る
4月18日	山梨時事新聞	社説 沖縄の“学童教育”
4月19日	山陽新聞（岡山）	沖縄の実情を語る（座談会）／祖国へ帰属したい／二十年かかる校舎の復旧／戦争で文化財壊滅／価値ある文化の再興を／留学生はみな日本行きを希望／振るわない生産力／パチンコは世論が反対／薄れた勤労精神／上昇する結核の死亡率
5月1日	中部日本新聞（愛知）	校舎復旧に協力を／屋良沖縄代表ら来名談

第1章 屋良朝苗の日本復帰運動の原点—1953年の全国行脚—

5月2日	岐阜タイムズ	日本復帰の援助を懇請／議会へ戦災校舎復旧の協力方も請願
5月5日	滋賀新聞	太平洋に取残された沖縄の子の悲願／全国行脚の途次代表来県、切々訴える／雨が降れば休校／風吹けば倒れる
5月7日	大和タイムズ(奈良)	土人小屋のような校舎／帰属問題などで県教委へ協力求む
5月8日	和歌山新聞	教室はカヤぶき／沖縄から復旧行脚
5月9日	伊勢新聞(三重)	泣いて仰いだ日章旗／学校復興に悲願の行脚／沖縄から屋良氏ら来県
5月12日	福井新聞	馬小屋のような茅葺校舎／教職員会長ら沖縄の教育実状を語る
5月13日	千葉新聞	沖縄に“日の丸”を／市町村会長ら来県
5月13日	北陸新聞(石川)	校舎は馬小屋も同然／祖国の愛情訴えて沖縄の教職員会長ら遥々来沢／悩み深しパンパン経済／労働者の殆どは軍事作業
5月13日	北国新聞(石川)	見るに忍びぬ校舎／一日も早く日本に復帰したい／沖縄の教職員会長らが来沢
5月14日	北日本新聞(富山)	“校舎は馬小屋同様”／沖縄の代表者、来県して訴える
5月15日	信濃毎日新聞(長野)	沖縄日本復帰の請願書／戦災校舎の復興も／代表が入信県会に／馬小屋同然の学校／米軍人夫で辛うじて生活
5月16日	作陽新聞(長野)	可哀そうな沖縄の子供たち／学校は馬小屋同様／校舎の復興に協力願いたい／代表が県へ陳情
5月17日	山梨時事新聞	カヤぶき校舎で勉強／一日も早く日本へ帰して／沖縄代表実情を訴う
5月21日	下野新聞(栃木)	“教育復興に援助を” 沖縄の教職員代表が訴う
5月22日	埼玉新聞	“戦災校舎復興に協力を” 沖縄から行脚の二氏来県
5月23日	山形新聞	いまも迷うひめゆりの霊／祖国復帰はいつ？／来県の沖縄教職員代表切々援助を訴う
5月24日	福島民報	望みない教育の復興／屋良氏沖縄の実情訴う
5月25日	岩手日報	沖縄の窮状訴えて両氏来県
5月26日	河北新報(宮城)	沖縄に祖国を／完全復帰叫んで全国行脚の両氏来仙／復興まだ戦前の二割／学校はカヤぶきバラック
5月30日	東奥日報(青森)	カヤぶきの土間教室／戦災校舎復旧と祖国復帰運動／沖縄から両氏が来県
6月3日	秋田魁新報	カヤ葺も破れた校舎／沖縄から祖国復帰に陳情
6月4日	新潟日報	ひどい沖縄の学校／代表らが来県／校舎復興に協力求む

### 3 復帰の論理

#### (1)日教組教研集会でのスピーチ

屋良が喜屋武と共に東京へ出発したのは1953年1月20日、那覇にて第1回祖国復帰総決起大会が開催された3日後のことであった<sup>26</sup>。出発の時の心境を屋良は「今日までに事務局並びに同志諸君の骨折りや激励に対するいよいよ決意を新たにした。目的を達しなければ死んでも帰って行けないのである」と記している<sup>27</sup>。翌日には総理府南方連絡事務局の吉田嗣延を訪問後、外務省の下田武三条約局長らを訪ね、教育行政の日本直轄を要請している<sup>28</sup>。

1月25日には高知県で開催された第2回日教組教研集会へ沖縄代表として参加した。屋良はそこで奄美代表とともにスピーチを行う。沖縄を「祖国と切離された太平洋の孤児」と表現し、「全島にみちている祖国を求めてやまない県民の真実の声」として、貧困に苦しむ教育環境などの諸問題を解決できるのは「祖国復帰である」と訴えた<sup>29</sup>。この時の様子を屋良は「待望のメッセージの時間迫る。力を込めて上る事なく朗読して行った。3分乃至5分位と云って居たと自分等のメッセージは特に全文読まして貰った。感謝にたえない。拍手も2回猛烈に送られた。会場はかたずをのんで皆聞いていたと思った」と記している<sup>30</sup>。その時の聴衆の反応としては、「大会第1日のヤマはなんといっても、日夜祖国へ切なる思慕の情をさせ、祖国復帰の熱い願いに胸をいためている奄美大島と沖縄の同胞の実態を訴えた両代表の挨拶だった。その時、会場内は感情のあふれが異常なボリュームでもり上り、場外の傍聴者も涙に顔を上げ得ない同情と共感にしめあげられた」という記録が残っている<sup>31</sup>。沖縄でも「屋良会長のメッセージ朗読にすすり泣く声しきり」「日本復帰の熱弁／教員大会で万雷の拍手」との見出しで報道された<sup>32</sup>。教研集会最終日の28日には緊急動議として沖縄・奄美に対する慰問支援案が提出され、満場一致で可決された。この時の様子を屋良は「会議中に沖縄の代表に面会人が多かった。それは見も知らぬ人々からの慰問激励の為であった。ああ有りがたい。血は水よりも濃しとでも云いましょうか」と記した<sup>33</sup>。

#### (2)衆議院文部委員会での証言

東京に戻った屋良は、自由党水谷昇代議士への働きかけを通して、2月6日の衆議院文部委員会へ出席、会が終了した後に委員たちへ沖縄の窮状を説明した<sup>34</sup>。そして2月19日、屋良と喜屋武は文部委員会へ正式に参考人として招致された<sup>35</sup>。そこで屋良は日本の主権回復に祝意を表しながらも、沖縄の置かれた国際的地位を「畸形的不明瞭な仮の姿」「国際浮浪的な存在」と言い表し、そのような環境にある子どもたちは「どうして真実の日本人として素直に成長して行くことができましようか」と述べた。さらには「沖縄の帰属の問題については国連憲章や平和条約締結の根本精神たる人道主義的立場からしても、また民族的文化的歴史的な関係からしても、さらに沖縄県民の心情からしても、祖国日本に復帰すべきことはきわめて当然」とし、そのために沖縄における日本人として教育の必要性を訴えた。また、沖縄戦については「かのアメリカの国運を賭しての大攻勢から、血をもって祖国を守って来



たわが将兵十万余、無辜の住民16万の骨を埋めたゆかりの地であります。それなるがゆえにこの島が犠牲となった巨万同胞の血のあがないのいかにもなく、いつまでも祖国より分離されておりましたは、地下の戦没者の霊も無念の血の叫びを続けていることでありましょう」と述べ、映画「ひめゆりの塔」に言及しながら<sup>36</sup>、「いたいたしくも祖国に殉じた青少年男女学徒等」が「身をもつて守つて来た祖国を失わたくはないのであります」とした。そして「国政に参加せられる皆様、どうぞこの島に眠る戦没者の魂の声を聞きとつていただきたい。また条件はどうであろうと、いやしくも祖国を有し、それと一連の共通の文化と歴史を持ち、日本人としての民族的矜持を有する沖縄の住民が、どうしていつまでも異民族の統治下に満足しておられましようか」と訴えた。続けて戦後復興の遅延、とりわけ教育については戦争による教員の喪失により、質・量とも低下し、校舎や設備についても復興が遅れていることを強調した。さらに教育環境の悪化についても「何しろ畸型的な基盤に立つ社会なるがゆえに、世相きわめて不健全であり、その所産として青少年悪質犯罪、婦人犯罪は加速度的に増加の一途をたどり、その恐るべき影響から子供らをいかに守って行くかは教育者の苦悩の種」と述べた。証言の最後には、要請を次の3点にまとめている。

- 1、沖縄の完全祖国復帰を実現するため、万全の措置を講じていただきたい。
- 2、祖国復帰の前提として、1日も早く沖縄の教育を完全に祖国の行政に直結せしめるため、万全の措置を講じていただきたい。
- 3、沖縄の戦災校舎の復興を援助せられる措置を講じていただきたい。

質疑応答では米軍による教育行政について質問があり、屋良は米軍から干渉があることを認めた。以上の議論の後、委員会は沖縄の教育振興に善処することを決議して終了した。

### (3)紙上座談会

東京での活動を終えた屋良は、全国各地を巡り陳情を行う。訪問先の1つである岡山県では山陽新聞が座談会を設け、その様子を掲載した<sup>37</sup>。座談会には屋良と喜屋武の他、外村吉之介倉敷民芸館長と山内光二岡山大学助教授、沖縄からの留学生1人が出席した。そこで屋良は、いつまで続くか分からない占領下において、将来に備えるためには教育しかないと述べる。しかし、その教育環境も「致命的悪条件である国際的地位のアイマイさ、教員の質の低下、校舎や設備の原始的状態、さらに社会的環境が本土でも大問題となっている基地附近の状態をそのまま濃縮したと云ってよいありさま」と説明した。また、外村が「領土帰属は民族の血と住民の意向の2つが問題となるが、もしアメリカの政策がよければ日本帰属は問題になってこないのではないかと質問したのに対しては「重大な本質的問題ですが、民族本来の欲求は権力でも物でも曲げられない。全琉球政府の立法院では満場一致で2回にわたって日本復帰を決議しており、なおかつ現実の施策に親心が感じられないから日本復帰の情がよいよかりたてられる」と答えている。

ここまで屋良による日教組教研集会でのスピーチ、文部委員会での証言および紙上座談会での発言をみてきた。これらから屋良の復帰の論理について以下3点のことがわかる。1点

目は戦災校舎復興のための支援もさることながら、祖国復帰の重要性を最も強く訴えていることである。文部委員会での陳情は、日本復帰のために日本人としての教育が必要であり、その日本人としての教育を円滑に施すためには、校舎の復興が必要という論理構成をとっている。つまり、最終的な目標は沖縄の日本復帰に設定されている。また、教育権を先行して日本の直轄とすることも合わせて陳情されたが、この教育権の日本直轄も日本復帰の前提とされている<sup>38</sup>。これらのことから、屋良が教育環境の整備というよりは日本復帰そのものを重視していたことは明らかであろう。2点目は、日本復帰の正統性を担保するものとして、沖縄戦の犠牲者を取り上げ、紙幅を割いて言及している点である。1953年前後に書かれた日本復帰の要請や決議文を概観すると、民族の「悲願」や「統一」は強調するものの、戦没者について触れたものは管見の限り見当たらない<sup>39</sup>。後年、琉球政府主席としての屋良が日本政府へ要請する際にも沖縄戦の惨禍についての言及は多少ある程度である<sup>40</sup>。これには1953年1月に公開され評判となった映画「ひめゆりの塔」の影響もあると考えられるが<sup>41</sup>、結果的に沖縄と祖国日本との「血」の繋がりを強調させることとなった。3点目は、1960年代の復帰運動を進展させる大きな要因であった日本国憲法と軍事基地による被害には言及されていない点である。前述の通り、1950年代前半の沖縄においては日本国憲法への関心がまだ高まっていなかった。米軍基地建設は1949年から始まっていたが、大きな問題となるのは1953年4月に「土地収用令」が公布されてからのことである<sup>42</sup>。これらの理由から、この時点では沖縄の青少年や女性による犯罪は言及されても、基地関連の犯罪や被害は語られていないと考えられる。

1968年の琉球政府主席選挙で「即時無条件全面返還」を公約として訴え当選した屋良は、日本政府との交渉では日本復帰の正統性を「民族の再統一」という民族的理由、「県民の総意」という政治的理由、日本国憲法による平和への希求に求めている<sup>43</sup>。しかし、いまだ基地被害が顕在化していない1953年の沖縄から訴えられた日本復帰の論理は、先に主権回復を果たした日本から切りはなされ、「畸形的」「孤児」「国際浮浪的」と表現された沖縄が、「民族同胞」へ救いを求めるという民族的理由が中心であった。このような民族的紐帯を強調する手法は、その後の復帰運動でも継続されることになる。

#### 4 屋良による沖縄および日本への認識

##### (1) 日本の農業への評価

ここまで屋良による日本復帰の論理を見てきた。それでは、屋良自身は日本をどのように認識し、評価していたのだろうか。1950年に福岡を訪れた際に、日本の整備されている教育環境に驚嘆していたことは前述の通りである。53年の全国行脚で屋良らは大都市のみならず地方各地を巡ったが、屋良がそこで目にしたのは、豊かな田園風景と沖縄より進んだ農業であった。

例えば山陰地方については「山陰は戦災を全然受けていない。寒い所と聞いていたが却っ

て暖く沿線に沿うた田や畑も青々として春らしい。散々<sup>マア</sup>伍々<sup>マア</sup>百姓が呑気そうに農業をしている。働きも楽なそうだ。田畑も一坪の無駄もなくよく耕されている。部落も建物もきちんとして羨しい限りだ。沖縄だけが何たる事か。砂漠の沖縄よ」と記している<sup>44</sup>。三重県では「途中の畠は一面麦の穂が出盛る頃。青々として波打っている。道をはさんで畠一面に麦は穂が出る、菜は花盛りと云ったその頃か。麦の青々たる間を菜の花が点綴している。とても気持がよい。見ても大変豊かそうである。又沖縄の百姓等に比べると豊かだろう。あれでも日本は貧乏だと云う。沖縄は貧乏を通りこして人の世の地獄だ。このような所での農業は骨も折れまい。又楽しかろう。実際沖縄の人程可愛想な人は恐らくこの世には居ないであろう<sup>45</sup>、山梨から東京への帰路の風景については「中央線路の景色、山又山であるが、野も畠も緑をたたえ、白赤のつつじが咲き乱れ若やぐ気持、うるおいのある気持になる。何処も同じ麦畠が整然としてみのっている。うらやましい。全くうらやましい。このようなめぐまれた環境に住み他府県の人々と太刀打ちして行くには余りに沖縄の我々は惨めである」との所感を残している<sup>46</sup>。

このように日誌には日本の豊かな農業に対する羨望が、沖縄の貧弱な農業と対比されながら記されている。農家出身の屋良にとって農業の発展は切実な問題として捉えられたであろう。しかし、東北地方の農業の様子について屋良は異なる印象をもっていた。岩手では「ここでは何も植えられていない。次の稲作の田ごしらえをしている。馬を使っているが原子的だ。沖縄などと同じである。それからすると台湾ははるかに進んでいる。能率的である<sup>47</sup>、秋田では「沿線では田植えがはじまっている。少年時代の田植えがなつかしい。ここあたりもやはり原始的な耕作しかやっていない様だ。台湾の方がはるかに進んでいる様に思う」と記されている<sup>48</sup>。ここで注目されるのは、東北地方の農業の水準が沖縄と同等であると考えられている点である。そして同時に、東北地方と台湾とを比較し、台湾の方が進んでいると記している。ここに日本の植民地となり、自らも入植した屋良の台湾への積極的な評価を垣間見ることができる。

## (2)植民地としての沖縄

一方、沖縄については異民族支配下の植民地状態であると明確に認識していた。2月の時点で「全国運動は沖縄新聞に記してよいかどうかは疑問である。軍を刺激する事になりはしないかと気になる。しかし私はあくまで軍に協力する事によってのみ<sup>マア</sup>沖縄の将来は開けないと信じてるのでその点は天地神明にちかって悔いがないと思っている。只日本の一地方として米国によりよく協力したいのだ」と<sup>49</sup>、日本への協力を直接よびかける全国行脚運動が沖縄で報道されることで、軍当局を余計に刺激することを危惧していた<sup>50</sup>。

4月1日に行われた琉球政府立法院中部地区補欠選挙では、社大党および人民党が推薦した天願朝行の当選を米国民政府が取り消した。このいわゆる「天願事件」について、屋良は以下のように記している。

それに中部の選挙も無効にするというし奴等の圧政は露骨になった。植民地化の具体的あらわれである。暗黒の時代だ。正に暗黒だ。一世の指導者がほしい。人物がない。東京に居る人が行ってもこれという人は殆どいない。沖縄よ何処に行く。慨わしい。選挙の結果女教員が肩をだき合っ泣いたとも云う。いじらしい。しかしよく指導しなければいけない。これは只給与ベース問題から来る感情問題としてはいけない。あくまでも今の与党の植民地的乞食根性の批判から来なければいけないのだ<sup>51</sup>

屋良によれば、沖縄教職員会が軍政府と対立する理由が、単なる給与問題ではなかったことがわかる。むしろ「植民地的乞食根性」と表現された、植民地的状況を甘受し経済的利益を得ることによる充足を屋良は強く戒めていた。このように米国民政府からの圧政が顕在化していく沖縄において、屋良は「いよいよ彼等は教職員会と闘争せんとするか。却って彼等は大損をするぞ」と対決姿勢を露わにしていく<sup>52</sup>。

屋良にとって日本は恵まれた教育環境のみならず、豊かな自然と発達した農業を備えた、国力豊かな国家であった。その日本の中で「原始的」と評された東北地方の風景が屋良に想起させたのは、日本統治下にあつて発展した台湾の記憶であった。これらは、米軍の圧政が強まり植民地となった沖縄が、再び日本の統治下におさまることによって社会的に安定し進歩すると屋良が考えた理由の1つと言える<sup>53</sup>。

## 5 屋良の民族認識

それでは、屋良は自己の民族認識について、どのように考えていたのだろうか。4月29日、東京から愛知へ向かう列車の中で、屋良は台湾時代の教え子に偶然出会う。その時のエピソードを次のように書いている。

18年に上京以来帰台しないとの事。理論物理を勉強し今明大で助手か何かして生活をしながら勉強をして居るとの事。話す気持はつい昔の同じ日本人としての気持に帰り勝ちだ。しかし、今は奇しくも二人共日本人ではない。彼は中国人、自分は国籍不明瞭。しかし師弟の気持に変わりはない<sup>54</sup>

ここで屋良は自分自身について、かつては日本人であったが、現在は「国籍不明瞭」と表している。

また、屋良は日誌の中では「沖縄人」という用語を何度か使用していた。例えば兵庫県での集会会場が、沖縄出身者が多く居住していた良元村<sup>55</sup>であった時には「その会場が大変な所だ。全くの田舎の開拓地。沖縄人部落だ。こんな所にこの催をするなんて人を馬鹿にしている」<sup>56</sup>と書いている。他にも、運動終了後に各地へ発送する礼状については直截的に「沖縄人の恩知らずと云われても困るのでつとめて手紙書くぞ」と表現している<sup>57</sup>。

この「沖縄人」という用語については、1951年3月、沖縄群島議会で沖縄群島教育基本条例案に関する質疑でも論点となっていた。条文にある「沖縄人」という言葉について当時沖縄群島政府文教部長であった屋良は「〔日本の教育基本法の〕国民を沖縄人と直した丈です」と述べていた。「沖縄人」という用語について発言や疑問等も特に議事録に残されていないことから、特に違和感なく用いられていたことがわかる<sup>58</sup>。

しかし屋良の民族意識は、「沖縄人」という用語の用法のみならず、沖縄の現状を危惧し、沖縄のために運動をしているという屋良自身の強い自負心によりはっきりと表れている。運動を展開している間の心情を屋良は以下のように書きつづっていた。「沖縄の人々の為に父は命をかけているのだ」<sup>59</sup>、「ああ、神よ仏よ沖縄の恵まれざる住民の為にこの度の仕事に栄光あれ。〔略〕国民的関心を作るまでは帰れないのだ」<sup>60</sup>、「僕の民族に寄せるこの大運動に神よ仏よ恵みを垂れさせ給え」<sup>61</sup>、「神よ哀れな民族の為に私を照覧して下さい。助けて下さい」<sup>62</sup>。これらの記述からは屋良の沖縄への思いを明解に読み取ることができる<sup>63</sup>。さらには、「民族」という用語が日本全体を指すというよりは沖縄の住民を意味して使われていることに気づかされる。公式の陳情書やインタビューでは日本民族を強調していた屋良であるが、日誌に記された内容からは、日本人という意識よりも、沖縄人として沖縄のために日本復帰運動を展開していたといえよう。

## おわりに

6月3日、最後の訪問先である新潟で戦災校舎復興運動の全旅程を終えた屋良は「数年前からの私の胸の中の計画が私の手によってここに芽出度く完了されたのである。実行した実践した。必ずや内外に大きな反響があるにちがいない」と確信し、「全国にわたる懇願の旅、今終る。御協力感謝す。意気ますます盛なり」との電報を駅から打電した<sup>64</sup>。そして16日には、「日本全国にもアピールした以上、今後私の動向には非常な責任が倍加された。沖縄に帰ったら更に大きいだらう。余りちやほやされてはいけないと思うが。乱世になれば或は私の性根があらわれるかも知れない。恐らく今まで以上に世に特質を発揮するのではないかと思う」「実際又沖縄に対する認識はうんと高まった事は事実だ。校舎運動の効果が上るとすれば我々の運動は特筆されてもよいだらう」と自らの運動を総括した<sup>65</sup>。

以上のように本章では沖縄戦災校舎復興募金運動を通して、屋良の復帰思想をナショナル・アイデンティティに着目しながら検討してきた。その結果明らかになった点は、以下のようにまとめることができる。まず、本運動で強調された復帰の論理は、沖縄と日本の「民族」としての繋がりであった。すなわち、後の復帰運動で大きな要因となる日本国憲法や基地被害などはこの時点の復帰運動では言及されていなかった。ここから「民族の再統一」というロジックが、屋良の復帰思想の原点であると結論づけることができる。

次に屋良は日本の教育環境のみならず、日本の自然や農業への羨望を抱いていた点である。農家生まれの屋良は、沖縄の農業の惨状に思いを馳せながら、日本の進んだ農業に圧倒的な

国力を見出していた。また同時に、日本占領下にあった台湾社会の発展を評価していた。このことは、沖縄が米軍の支配下から脱却し、日本の統治下におさまることで社会的発展が得られるという復帰思想に影響を与えたと考えられる。

しかし、屋良のアイデンティティとしては、日本人というよりはむしろ沖縄人としての意識の方が強かった。また、自らの日本復帰運動は沖縄を案じ沖縄のための運動であると強く自覚していた。その意味で、この沖縄戦災校舎復興募金運動は、校舎復興による教育環境の改善ではなく、ましてや教員の待遇改善のような自らの利益を求めるためになされた運動ではなかった。極めて沖縄全体を憂い、沖縄の未来のために展開された運動であったのである。

- 
- 1 主なものとして、桜澤誠「戦後沖縄における『68年体制』の成立—復帰運動における沖縄教職員会の動向を中心に—」『立命館大学人文科学研究科紀要』第82号（立命館大学人文科学研究所、2003年）、藤澤健一『沖縄／教育権力の現代史』（社会評論社、2005年）、小国喜弘『戦後教育のなかの〈国民〉—乱反射するナショナリズム—』（吉川弘文館、2007年）、戸邊秀明『『戦後』沖縄における復帰運動の出発—教員層からみる戦場後／占領下の社会と運動—』『日本史研究』第547号（日本史研究会、2008年）、奥平一『戦後沖縄教育運動史—復帰運動における沖縄教職員会の光と影—』（ボーダーインク、2010年）、高橋順子『沖縄〈復帰〉の構造—ナショナル・アイデンティティの編成過程—』（新宿書房、2011年）がある。
  - 2 西原森茂「政治指導者としての屋良朝苗」『沖縄法学』第30号（沖縄国際大学、2001年）、「屋良政権の政策考」『沖縄法学』第32号（沖縄国際大学、2003年）。
  - 3 小熊英二『日本人の〈境界〉』（新曜社、1998年）、556-597頁。
  - 4 屋良朝苗『屋良朝苗回顧録』（朝日新聞社、1977年）、31頁。
  - 5 屋良朝苗『沖縄はだまっていられない—遙かなる本土への直訴状—』（エール出版社、1969年a）、86-122頁。
  - 6 屋良、前掲書（1969年a）、126頁。
  - 7 屋良朝苗『沖縄の夜明け—いのちを守る闘い—』（あゆみ出版社、1969年b）、107-108頁。
  - 8 屋良、前掲書（1969年a）、129頁。
  - 9 屋良、前掲書（1969年b）、115-116頁。
  - 10 屋良、前掲書（1969年b）、117頁。
  - 11 屋良、前掲書（1969年a）、138頁。
  - 12 屋良、前掲書（1969年a）、148頁。
  - 13 屋良、前掲書（1977年）、10-11頁。
  - 14 屋良、前掲書（1969年a）、156頁。
  - 15 屋良、前掲書（1977年）、16-17頁。なお、この校長会での挨拶では「我々の主権の残存し近い将来同一行政下に戻る日本本土と軌を一にする教育こそ我々の進むべき教育の道である」と語っている。「第3回全島校長会挨拶」『琉球史料 第3集』（琉球政府文教局、1958年）、121頁。
  - 16 新崎盛暉『戦後沖縄史』（日本評論社、1976年）、22-24頁。
  - 17 同上、53頁。
  - 18 納富香織「仲吉良光論—沖縄近現代史における『復帰男』の再検討—」『史論』第57号、

- (東京女子大学、2004年)。
- 19 桜澤誠「戦後初期の沖縄における復帰論／独立論の再検討—講和交渉期の帰属論争の思想的内実—」『日本思想史学』第39号(日本思想史学会、2007年)。
- 20 新崎、前掲書、76頁。なお、この「日本復帰促進期成会」の副会長は自治体の首長であり、署名活動では行政職員が動員されたことは留意する必要があるという。上地聡子「日本『復帰』署名運動の担い手—行政機構と沖縄青年連合会—」『沖縄文化』第40巻2号(沖縄文化協会、2006年)。
- 21 上地聡子「『復帰』における憲法の不在」『琉球・沖縄研究』第3号(早稲田大学琉球・沖縄研究所、2010年)。
- 22 鳥山淳「戦後初期沖縄における自治の希求と屈折」『戦後日本の民衆意識と知識人—年報・日本現代史』第8号(現代史料出版、2002年)、204-205頁。
- 23 戸邊、前掲論文。
- 24 この写真は新聞報道で使われたほか、『中等教育資料』第4号(文部省中学校課・高等学校課編、1953年)に掲載された。
- 25 戦災校舎復興募金運動についての屋良による述懐は以下の著作に詳しい。屋良朝苗『沖縄教職員会 16年—祖国復帰・日本国民としての教育をめざして—』(労働旬報社、1968年)、47-54頁、前掲書(1969年a)、162-169頁、前掲書(1969年b)、152-159頁、前掲書(1977年)、20-31頁。
- 26 「こもごも祖国復帰の熱弁／この至情本土に届け／華々しく行われた総決起大会」『沖縄タイムス』(1953年1月18日)。ここで屋良は「民族の悲願達成に住民の総意を結集し、不退転の決意をもって進もう」と述べている。
- 27 『屋良朝苗日誌001』(1953年1月20日)沖縄県公文書館所蔵。以下、『屋良日誌001』(1953年1月20日)などと略記。
- 28 『屋良日誌001』(1953年1月21日)。なお、日誌には「下田武二」とある。
- 29 「沖縄・奄美代表も挨拶／祖国復帰に協力を／悲惨な実情を訴える」(1953年2月6日)日本教職員組合『日教組教育新聞』(労働旬報社、1969年)、153頁。
- 30 『屋良日誌001』(1953年1月25日)。
- 31 日本教職員組合『教育評論』第2巻第3号(1953年)、28頁。
- 32 「屋良会長のメッセージ朗読にすすり泣きの声しきり／日本教職員研究大会に沖縄代表も参加」『沖縄タイムス』(1953年1月30日)、「熱意にあふれる激励／日教組大会で“琉球を援けよう”」『沖縄タイムス』(2月3日)、「日本復帰の熱弁／教員大会で万雷の拍手」『琉球新報』(1月30日)。
- 33 『屋良日誌001』(1953年1月28日)。
- 34 『屋良日誌001』(1953年2月6日)および第15回国会衆議院文部委員会議事録第8号(1953年2月6日)。この時の説明は非公式なものであったため、内容は議事録として残っていない。なお、本章で引用している議事録はいずれも『国会議事録検索システム』<<http://kokkai.ndl.go.jp>>より、2011年7月5日アクセス。
- 35 第15回国会衆議院文部委員会議事録第10号(1953年2月19日)。
- 36 屋良は映画「ひめゆりの塔」を教研集会終了後の高知で鑑賞している。『屋良日誌001』(1953年1月29日)。
- 37 「沖縄の実情を語る」『山陽新聞』(1953年4月19日)。
- 38 なお、3月6日の日誌には以下の様な記述がある。「[外務省] 倭島亜細亜局長に聞いた所、話はどんどん進んでいるとの事。それは教育行政権の返却の事のような事。この事は現

---

地軍も賛成して後はアメリカへの接衝あるのみと云っていた。次に完全復帰については教育を戻して、現地の軍事行政に支障がなければ次々と皆戻して行く事になろうと云っていた」『屋良日誌 001』(1953年3月6日)。

39 沖縄県祖国復帰闘争史編纂委員会編『沖縄県祖国復帰闘争史資料編』(沖縄時事出版、1982年)、21-50頁。

40 屋良朝苗「佐藤総理大臣に訴える」(法政大学沖縄文化研究所所蔵、1969年11月11日)。なお、佐藤首相との会談は11月10日だが、書面上の日付は11月11日になっている。

41 映画「ひめゆりの塔」に対する評価については北村毅『死者たちの戦後誌』(御茶の水書房、2009年)、139頁。

42 鳥山淳「1950年代初頭の沖縄における米軍基地建設のインパクト」『沖縄大学地域研究所所報』第31号(沖縄大学、2004年)。

43 屋良、前掲(1969年11月11日)。

44 『屋良日誌 001』(1953年3月24日)。

45 『屋良日誌 058』(1953年5月9日)。

46 『屋良日誌 058』(1953年5月16日)。

47 『屋良日誌 058』(1953年5月25日)。

48 『屋良日誌 051』(1953年5月31日)。

49 『屋良日誌 001』(1953年2月3日)。

50 実際、『琉球列島米国民政府(USCAR)渉外局文書』として、沖縄戦災校舎復興募金運動に関する新聞記事を英訳したものが残されている。Okinawa Gunto Government Files, 1950-1952. "Teachers Association" Apr 1952 - May 1954. 資料コード U81101333B(沖縄県公文書館所蔵)。

51 『屋良日誌 058』(1953年4月20日)。

52 『屋良日誌 051』(1953年5月29日)。

53 後年、屋良が台湾時代を回顧したエッセイでは、日本統治下で建設された人工ダムによってサトウキビや米の収穫が大幅に増産できたことについて以下のように語っている。「日本統治時代の遺産であっても、台湾の人々のために今もなお測り知れない福祉源となっていることは幸いである」。屋良朝苗「私が台湾で学んだこと—台南第二中学校での思い出—」『新沖縄文学』第60号(沖縄タイムス社、1984年)。

54 『屋良日誌 058』(1953年4月29日)。

55 この時屋良は沖縄協会兵庫県支部を訪ねているが、兵庫県良元村における沖縄人コミュニティーについては以下を参照されたい。山口覚「複雑化する『結びあい』—戦後兵庫県における沖縄出身者の都市生活—」『地理科学』第57巻第1号(地理科学学会、2002年)、「激動の時を生きる—戦前・戦後における沖縄出身者と同郷者集団—」『人文論究』第53巻第1号(関西学院大学、2003年)。またこの時の様子も含めて、全国戦災校舎復興募金運動は大阪で発行されていた日本在住沖縄人向けの新聞『球陽新聞』(沖縄県公文書館所蔵)で詳しく報道されていた。「全国民の力で戦災校舎を復興／屋良教職員会長等奮闘」(3月11日)、「屋良氏一行来阪／沖縄の現状を訴う」(3月21日)、「戦災校舎復旧運動進む／祖国同胞にすがる外なし／集まる同情の献金」(6月1日)、「校舎復興へこの熱意／愛児の病秘めて全国行脚」(6月11日)、「沖縄戦災校舎復旧／全国から義金続々集まる／関西方面も愈々起き上る」(7月21日)。

なお、日本在住の沖縄出身者と屋良による日本復帰運動の共鳴及び齟齬は看過できない重要なテーマであるが、ここでは一例として以下のやり取りを示すにとどめる。「伊江朝助、



神山政良、東恩納寛惇先輩に会う。〔略〕三先輩の初めの態度に憤りを感じた。今沖縄で第一線で私が捨身の活動をしていると云うのに彼等から全然積極的に話にふれて来ない。けしからぬ。かかる先輩等が何の仕事ができるのだ。しかし時が来て僕が沖縄事情を腹の底からぶっ放した。深刻な顔をして聞いていた。遂に彼等は生き返った。そして沖縄の先輩らしい者に返った。よく分かった、これは大変だと云いだした。遂に誠意、熱意、先輩を奮起させた。力になってくれるだろう。新聞を二枚程配る。大仕掛の宣伝に驚いていた。この熱演を国民大会でやらずとか。又東恩納先生は天皇陛下に御目にかかれぬかなどと云っていた』『屋良日誌 001』(1953年2月7日)。

56 『屋良日誌 001』(1953年3月22日)。

57 『屋良日誌 051』(1953年8月7日)。

58 「第6回沖縄群島議会(定例会)文教厚生委員会議事録」『琉球史料 第3集』、121頁。小熊、前掲書、562頁。なお、後年屋良は「沖縄人」という表現は「あくまで暫定的な考え」であったと釈明している。屋良、前掲書(1968年)、138頁。

59 『屋良日誌 001』(1953年2月3日)。

60 『屋良日誌 001』(1953年3月1日)。

61 『屋良日誌 001』(1953年3月7日)。

62 『屋良日誌 058』(1953年5月16日)。

63 この時期の『屋良日誌』には沖縄で病床にあった息子を案じる記述も数多くあった。息子の病状への心痛から、沖縄全体への憂いが重ね合わされたことも指摘できる。

64 『屋良日誌 051』(1953年6月3日)。

65 『屋良日誌 051』(1953年6月16日)。